

1P 長崎北道場の一般それ

に幼年部の会員の皆さん、本部や各支部道場さらには父兄など道場の運営をサポートしてくれている関係者の皆さん明けましておめでとございます。気分もあらたに、新年のはじまりです。

2008年(平成20年)1月1日 今年は特に十二干支の一番はじまりであるネズミ年、それに今月十一日からは万生館合気道として名称が九年ぶりに変わり、新たな第一歩がスタートします。

北道場機関誌「岩屋通信」第16号 万生館合気道長崎北道場
もちろん技やその心は今までと同じですが、一歩踏み込んで考えると、社会に対する責任感はずす重くなってくるでしょう。それだけ武道として「本物」が求められている時代なのです。

干支のネズミといえば、本県の対馬には昔からツシヤママネコという大陸

のベンガルヤマネコに近い小型のネコ科の動物が生息しております。昔、対馬が大陸と陸続きだったということを示す貴重な種であり、沖縄県西表島に生息するイリオモテヤマネコなどと共に法律に基づき絶滅危惧種に指定されています。

このツシヤママネコの好物の餌がネズミなのです。

一般的にヤマネコというので、対馬の奥深い山林の中に生息していると思われがちですが、ネコ科の生態専門家の、電波発信器機を個体に取り付けた調査などでは、対馬の西北部を中心とした山林の縁の田畑近くで夜間を中心に活動し、主にネズミや昆虫類を餌にしています。

戦後すぐの頃までは、対馬全島にかなりの数が生息していたといわれますが、今や百頭前後です。その原因は開発による

もの、あるいは昔、毛皮用や一説では食用までにも捕獲されていたからなどいわれております。

詳しい原因などは省略しますが(昨今は、動物ブームとかで、書店やインターネットなどでモカナリ情報が出ています)、要は人間側が、少し前にこのヤマネコの現状を憂いて手厚い保護対策を取っていたら、昨今のように絶滅のおそれと大騒ぎしなくても、もっとじっくりと保護対策ができたのかも知れません。

物事の価値を多方面から客観的な目でしっかり見つめる、特に未来に向けて幼年部や中・高校生諸君には、我々大人自身の自責の念を込めて、そのことを年の初めに申し上げておきたいと思えます。このツシヤママネコのは、子どもたちには少しむずかしかったかも知れませんが、あと二つ事

例を。

最近、長崎市街地の中央橋付近でも大規模なものが撤去されましたが、「人道橋」、自動車社会の本格化とともに車の渋滞を避ける、また人を自動車事故から守る画期的な構造物としてどんどん設置され、その当時は便利なものと思われていました。

しかし高齢化が進み、老人の社会進出が目覚しくなってくると、これほど街歩きの時、上り下りに苦労するものはありません。最近ではかなり撤去されつつあり、信号機設置などにより、歩行者優先の交通システムが一般化してきたことはたいへん喜ばしいことです。

また、長崎の秋の伝統祭りの「おくんち」、筆者は小学生の頃、大波止のお旅所付近のお化け屋敷やサイカス見物に時の経つもの忘れて没頭したものでした。

この踊り町、昨年勇壮なシャチ太鼓を披露した銀屋町、この町名は久しく消えていたのですが数十年振りに復活して、担ぎ手も大いに気合が入ったものでした。これも長崎の街づくりの歴史よりも便利さ優先、すなわち町割りを道路に囲まれた空間毎に行いその結果、銀屋町は東古川町とかになっていたのがまた銀屋町として復活したのです。

これも長崎の伝統を重んじた、人間の文化社会再評価への変換の賜物でしょう。しかし、郵便物のアドレス変更とか住んでいる方々は手間がたいへんだらうなと心配するのは筆者だけでしょうか。

「社会の中における武道のあり方」について
今、人々の生活は、各自がマイカー、各家庭にはパソコンの設置、水洗トイレ等非常に便利になり、また、

そのシステムも日進月歩
進化している昨今である。

2P 世界のあらゆる情報が
家にいながらにして、新聞、
テレビ、パソコン等で知る
ことができ、また、買物も
家からの発信によってで
きるのである。

2008年(平成20年)1月1日
このことは、文明が発達
している二十一世紀の現
在の状況であり、我々はこ
うした状況に合わせた生
活をしていかなければな
らい。

北道場機関誌「岩屋通信」第16号
一方、子供達の間ではテ
レビゲーム等の遊びが主
流になり、友達のところ
遊びに行ってもそうした
ゲームをするため、屋外で
子供たちが泥まみれにな
って遊ぶ姿は、ほとんど見
られなくなってきた。

万生館合気道長崎北道場機関誌「岩屋通信」第16号
このような状況下にお
いて、人間自体の精神が文
明に比例しているかとい
うと、様々な事件事故が発
生していることから明
らかなように、非常に疑問
である。

殺人事件や一家心中な
どは主に都会の出来事と
して昔は受けとめられて
いたが、それが今では都会
も田舎も関係なく発生し
ている。

すべての事件事故は、明
日は我が身として考えて
もおかしくない時代であ
る。

便利になった反面、それ
に逆行するかのように入
間の心が、非常に昔の人か
らしたら考えられないよ
うなものになりつつある。

したがって、そうした事
件事故に遭わないように
するには、自分自身で我が
身を護るしかない。

合気万生道の有段者交
流研修会において、砂泊先
生は「あらゆる武道を極め
た植芝先生は、武道の目的
は、相手と争うことなく、
相手と一体となることで
あると常々言われていた。
」ということを稽古の中
でよく話しをされる。
このことは、争いごとを

武道の精神で収めるとい
うことであるが、凡人で
ある我々には、実際は非常
に難しく、相手から言われ
たら頭にくるし、血圧も上
がるわけである。

しかし、合気道の教えが
そこにあるからこそ、なん
とか自己コントロールし
ていくことができると思
う。

また、以前長崎道場の中
山さんから聞いた話であ
るが、「雑誌で読んだ中に、
どこの流派かわからない
が、合気道の有段者になっ
たばかりの外国の人が、帰
りの通勤電車の中で刃物
を持った日本人が暴れて
いて、ここでその外国の人
が、自己の腕試しと思いつ
つていた席を立とうとし
たその瞬間、白髪の老人が
暴れていた人の前に現れ、
「何か面白くないことで
もあつたのかな、お前もつ
らいな、色々事情があるの
だろうな、じゃ次の駅で降
りて一杯飲みに行こう。」

ということではなだめすか
すようにしたところ、電車
の中は何事もなかったか
のようになり一件落着し
た。

そこで、その外国の人は
「これぞ誠の合気道であ
ると思った。」ということ
を中山さんが言っていた。

このことは、沢庵和尚の
トラの逸話とよく似てい
るところがあり話として
はすごいし、そうなりたい
願望もあるが、実際は大変
危険である。

しかし、植芝先生が求め
られているところは、こう
したところであり、また、
砂泊先生は我々に道を迷
うことがないように導か
れている。

我々はそうした道にさ
らに磨きをかけ、歩んで行
かなければならないと思
う。

時代がいくら便利にな
ったとは言え、いやむしろ
便利な時代になればなる
ほど、人々の余暇の主流は、
険しい山に登ったり、寒風

吹きつける時でも魚釣り
をしたりと、自然の中に自
分の身を置いて何かを見
出そうとするものである。
そうした余暇は、人間の
心が皆さんでくれば来る
ほど、求める気持ちが強
くなるものである。

人間の気持ちの不安定
が多い昨今ではあるが、武
道本来の目的は何である
かをしっかりと認識し、稽
古していかなければなら
ない。

社会の中における武道
のあり方は、そうした人々
の精神的な気持ちの安定
を達成するためにあると
思う。(平成十七年三月
濱田)

今年の稽古は、一月九日
(水)からです。今年も一
年間元気で頑張りましょ
う！

早速、一月二十七日(日)
は熊本の本部での新年会
を兼ねた研修会です。また
二月下旬には道場内での
演武大会もあります。